「渾身」全国キャンペーン報告②

錦織監督 映画の現場から

地元愛 博多っ子も激賞

●○● 40

映画「渾身（こんしん）」の全国巡業（キャンペーン）は各地で反響をいただき、隠岐の映画が〝日本の心の映画〟だと多くの方に言っていただいているのが、何よりうれしい。

古き良き日本を感じながらも隠岐に生きる人たちの強い思いに感動する人も多く、隠岐の歴史観や島ならではの死生観などを口にする人もいる。最初は相撲の映画だと思って見たが、島の心に触れて癒やされた、という声も。高校生や中学生くらいの子が「渾身」を見て泣いている姿をみると、殺人的なスケジュールの全国巡業ももっと忙しくても良いぞ、という気になってくる。

撮らせていただいた側としては何としても隠岐の心を伝えたい、という強い意気込みで撮影に臨んだ。どこまで隠岐を描けているのかは正直分からない。私自身が感じた隠岐をそのまま描いたつもりだが、果たしてどんな隠岐がスクリーンに映っているのか、隠岐の皆さまにぜひ確かめていただくとうれしい。忌憚（きたん）のない感想をお聞かせ願えれば、と思う（ぜひ公式フェイスブックへ）。

もちろん隠岐の方以外も大歓迎（笑）。〝巡業〟で全国の皆さんと触れあえば触れあうほど、撮影にご協力いただいた方々一人一人にお礼を述べなければ、という思いが募ると同時に隠岐の映画を撮れたことを誇りに思う。

福岡キャンペーンでのこと。博多の山笠は櫛田神社（御祭神は櫛田姫（くしなだひめ）…出雲の神！）のお祭りだが、めんたいこのふくやの川原社長さんも「思いは同じ」とおっしゃっていただいた。祭りに出るため仕事を辞めた人もいるというほど博多っ子にとって山笠は誇り。

しかし、700年以上続くこのお祭りが一時陰りを見せたことがあったという。昭和40年代に行われた地区の再編によって地元意識が薄れ、祭りに参加する人が減ったのが原因で、このままでは博多が博多でなくなってしまう、という危機感から、ふくやの先代を中心に山笠を盛り返したという。

守ろう、とか活性化しよう、というのではなく〝博多が好き〟という他にない地元愛こそが大事だと熱く語る社長の言葉にブレはない。一勝一敗の精神は商売にも通じ、一人勝ちではなくみんなで良くなっていかないと祭りやお店も続かない、一見非合理で無駄なように見える祭りが残り、それが大好きな大人や子どもが多くいるということこそ、地域の真の力であるという言葉が印象的だった。渾身は博多っ子も熱くさせる映画だとお墨付きをいただいた。

既に富山や名古屋、長野の劇場で、どの映画よりも大きな渾身の大看板が立ち、劇場中が渾身のポップであふれかえっているといううれしい知らせが届いた。全国公開まであと1カ月。渾身〝巡業〟はまだまだ続く。

（錦織良成・映画監督）

＝第2、4金曜掲載＝

映画館前に掲出された映画「渾身」のポスターやパネル